

## 第2部 ディスカッション



渡戸 それぞれ充実した内容の報告が続きましたので、この町田、相模原という地域を中心として、かなり広がりのある問題提起がされたのではないかと思います。取りあえずそれぞれの報告者の方が言い残した点があれば、お話しいただいて、その後、会場からご質問やご意見をいただければと思います。

ソン 町田と相模原に行って感じたことは、両市は生活圏がほぼ同じで、交通の便から見て、そのルートから見て、越境ということが普通に行われている。藤代さんは町田で仕事をしていますが、住所は相模原です。こういう方がたくさんいらっしゃることを考えると、広域連携といっても、実は広域でも何でもないような状態です。外国人にとっては、それぞれが便利で都合がいいところで支援を求める状況は普通にあるので、今後、国の政策のない状況の中で、自治体がそれぞれの施策を行うところにおいて、この行政のバリアをどう取り払うかということが、自治体にも求められていると実感しました。

**武田** 先ほど紹介できなかったことがあります。「さがみはら国際交流ラウンジ」で外国人相談をやっている「カラバオ・相模原」と「葦の会」の方からお話をうかがいました。この2つの団体は80年代後半から外国人支援をずっとやってきたところで、経験、知識、独自に持っているネットワークがあります。「葦の会」の方は、一緒にやっている外国人と、「私たちは携帯電話の番号を変えられないのよ」、とおっしゃっていました。その電話番号がライフラインというか、外国人の人たちは、何か困ったときには取りあえずその電話番号にかけてみる、という状況になっているからです。

私たちがお話をうかがっているときに、相模原市で外国人相談を担当している職員の方が、相談者と一緒に「ラウンジ」においでになりました。その方は在留資格がなく、妊娠されたので生まれてくるお子さんの国籍を含めてこれからどうしようというご相談のようでした。行政の外国人相談の担当者が「ラウンジ」の外国人相談の担当者のところになぜその方を連れて来たかということ、行政の外国人相談は勤務時間内でしか対応できません。相談を聞くことはできますが、支援活動はできないという制約があるのです。行政の側から民間の相談窓口連携を求めてくる、つないでくれるという光景を見まして、経験と実践に裏付けられた民間組織の専門性の高さや相談者に対するまなざしの深さに心が動かされました。その辺も補完し合うという点で行政と市民団体の連携を考える糸口になると感じます。

**関** 私も相模原の柔軟性と専門性の高さということを述べようと思っており、今言っていたことに同感です。

それとは別の話ですが、外国人相談については、やはり広報に関してももう少し工夫が必要だろうと思っています。先ほど高橋さんから各コミュニティ別のエスニックメディアというようなものの例のご紹介もありましたが、やはり広報する側も、そういうものをキチンと使って広報すれば、まだまだ相談者数は増えるのではないかと思います。

また、広域連携との関係では、今度、相模原と町田を連携していくとなると、都県境を超えなければいけないという問題があります。町田の良い点は東京都のネットワークに組み込まれていることですが、本当にそれを神奈川県にまで広げることができるのかどうかというのが正念場だと思います。東京都の予算がある程度使われている中で、相模原市を組み込んで許されるのかということがあるかもしれません。そこが逆に言えば面白いところなので、ぜひ良い前例をつくりたいと思っています。

高橋 国を移動したことで生じる問題はもちろんありますが、例えば子どもの発達のことやコミュニケーションや学習能力などいろいろなことが、母国にいても実はあったということを経験聞きます。学校の先生はじめ現場の方々は、そこだけを見ていて、日本に来て問題が起こったと思ってらっしゃるケースが多いように思えますが、よく聞



いてみると、向こうの小学校に入ったときから問題があったということもあります。だから、ただ国が変わったから不適應ということだけではなくて、その前から何かあったのではないかということも含めて、いろいろ対応するといいいのではないかと思います。

渡戸 それぞれに非常に重要なお話でしたが、今回の研究フィールドになっている地域の方から、実践されている立場でお話をいただければと思います。

発言者その① 私自身、町田市で外国人相談員をやらせていただいているのですが、それほど経験があるわけではありません。定年退職した後に、こういう活動があるということで、グローバル化ということが非常に最近問題になりますので、そういうことから始めました。私が今日、非常に感銘を受けたのは、武田先生の話の中で、町田市の話をしてくださって、私たちも「国際交流センター」の中にいるのですけれども、なかなか今のような話が伝わってこないという現状があって、それは私の不勉強だったのですが、そういう感じがしました。実践的な面で言いますと、外国人相談の中の内容が在留資格の問題だとか、国際結婚の問題というようなものが、相談の中の5割以上を占めているので、この問題をみんなで勉強しようということが現状です。歴史があるのでしょうけれども、私は3～4年の経験しかありませんので、取りあえずみんなで勉強しようというのが、町田市の外国人相談の現状です。

発言者その② 30年近く前から相模原市で国際交流活動に参加させていただいて、いろいろなことを相模原で学んできました。地域の市民団体の活動の強さというものを大変意識してきました。それを基にして、町田国際協会ができたときに、行政の側から誘われてボランティアに参加したのですが、そのときにやはり

町田はまだ市民活動が熟していないと感じました。少しずつ私も自分の力の及ぶ限りやってきたのですが、市民の国際交流活動への意識と行政の考え方の一致点がなかなか見いだせないというのが今の私の率直な感想です。今日、参加して、いろいろなことを学びましたが、一番感じたのは、やはり相模原と町田と、もともと共通の生活圏があり、今は行政は、図書館にしてもいろいろな行政の活動にしても、両市は大変に協力し合っているところなので、これから国際交流活動、ボランティア活動も、さらに協力し合っていけたらいいと感じました。

**渡戸** 前浜松市長で、衆議院議員も務め、この度東外大多言語・多文化教育研究センターの教授に就任された北脇保之さんにコメントをしていただきたいと思います。



北脇保之

**北脇保之** 非常に貴重な発表だったと思います。いくつかあるのですが、ひとつは「区域を超えた行政・市民連携の可能性」ということですが、私はこの点については、特に自治体の場合は自治体の意思次第で、たとえ県を超えていても、連携、協力は十分可能だと思います。国の政策を持ち出す必要はあまりないのですが、国の政策としても、県境の自治体同士が共通の問題を抱えていることはいろいろな面であるものですから、それをもう少し後押ししようという考えもあります。ですから、町田市と相模原市の場合も、特に両市の方が、こういうことを十分意識してやろうと考えれば、展

開は十分可能だと感じます。

2点目は、今日は実践者の皆さんと研究者の方ということで、行政の方がほとんど参加していないのです。研究者と市民の皆さんは、割合親近性があるというか、なじみ深さがあるのですが、市民団体の皆さんと行政というのは、同じ場所にいて同じ仕事をしているはずなのに、非常に壁があるというか、お互いに不信感を持っている部分があるのです。

ですから、その辺をまず地域の中で、誤解があればそれを解く、また一緒に協力し合っていくための理解を進める対話が必要だと思うし、この「渡戸・関班」のいろいろな取り組みの中でも、実践的な研究ということですので、行政と中間支援団体もしくはボランティアの皆さんとの間の関係をより良くしていくというふうに、何か返していくことができればいいのではないかと感じます。

最後に、ソンさんの話は私にとっても貴重だったのですが、特に国の、いわゆる統合政策ということについて、私は浜松市長として外国人集住都市会議を呼び

かけて、散々国に対して政策をハッキリ実施するべきだと言ってきたのだけど、それが無いのです。韓国は、むしろ私は社会問題としては、日本よりも少し後から追いかけてきているような状況だろうと思うのですが、にもかかわらず、国の政策としては非常に明快に打ち出しているという、その違いがどこから出ているのかということ



を、また改めてぜひジックリと聞かせていただきたい。それもまた広く市民の皆さんにお話ししていただけると、非常に広い視野で物事が考えられるようになるのではないかと感じました。

**渡戸** 会場には自治体の方や高校の教員の方など、いろいろ実践されている方も多いと思うのですが、お願いいたします。

**発言者その③** 私は、中央民族大学の教授として、今、大学で勉強しています。専門は多文化教育と少数民族です。私の考えは、日本の外国人問題はいろいろランクがあります。私の知っている限り、この中で一番問題なのは、日本への留学生です。16歳、17歳から自分の国で働いて、遠い国から文化が全然異なる日本に来ている。文化の衝突が一番大きい。経済力、勉強力、これが一番の問題。ですから、この面でもっと相談などができるようになれば、学校で地域で安定した生活が送れるような感じを持ちます。

2番目は、日本で外国人は、もっと自分自身の体験を紹介するといいいです。日本人だけでなく、外国人が日本でうまくできる、成功できる外国人を紹介することも、自分の民族の説明をすることもいいことだと思います。この面で、2つの市は、学校と連携して、日本の学校の学生と留学生とのシンポジウムをやるとかすればいい。

3番目は、外国からの労働者がたくさん日本に来ているという問題です。中国からはあまり日本語ができない人も、金があまりない人も、日本の学校に入ります。この辺のことは、日本人はもっと中国関係者と協力して、レベルの高い人、品質のいい人、まじめに日本で勉強する人が入るようにすれば、日本に入った後での問題が少なくなると思います。

**発言者その④** こういう2つの市をまたいでという切り口は非常に新しい視点だと、興味深く聞かせていただきました。そういった中で、ベースとしては地方自治制度みたいなものがどこかに絡んでくるという話になるので、研究の中に行政の方が入っていた方がいいという感じがしました。例えば、先ほどの条例制定の話なども、最重要課題を必ずしも条例で回すかということ、自治体はそこそそそれぞれの運営手法を取りますのでそうでもないで、そういった切り口で見ていくと、どこかに調整が必要になってきます。予算執行も、条例があるから予算執行という考え方は、少し用語のとらえ方が違う気がします。

相模原の「ラウンジ」を評価されていて、ぜひ外側からの評価も取り入れられるといいと思います。例えば、果たしてスペースがあったかなという感じがして、いつも場所を取るのに大変です。結局、日本語のグループの人たちは公民館を使って、それをネットワーク化しているという、それは非常にいいことと思うのですが、そういう事情もあります。さらに、広域ということ言えば、都道府県の役割をもう少し考察してみる必要があると思います。神奈川県は常設の、言語で言うと6~7の相談機能がありますので、たぶん1,000件以上の相談を受けていると思います。それも大半が電話で受けていますので、そういったところとの兼ね合い、そこを埋めるところでどういう機能を果たすのかということも考える必要があると思います。むしろその辺については、相談から支援のシームレス化というのですか。先ほどおっしゃっていましたが、それが今求められているという感じがします。行政相談というのは、受けて答えるだけです。それをどうやって必要とところにつないでいき、支援が必要だったら支援につなぐかということが大切なのではないかと思います。

最後ですが、面白かったと思ったのは、大学と組んだらどうかというお話で、京都は100億円かけた留学生の建物や住宅保証などもやっていますけれども、そこまでいなくても、大学の事業に相談機能が生まれたら非常に面白いと思いました。

**発言者その⑤** 私は町田市で日本語学習支援のボランティアをやっています。あと、日本語学習支援ボランティア養成講座のプロジェクトチームにも入っています。養成講座のプロジェクトは今年立ち上がったのですけども、その第一の目的として、「町田国際交流センター」の中での日本語教室だけではなくて、町田市にあるあと2つの日本語教室と、できれば広域連携とか、相模原市や厚木や大和からの学習者にもインドシナの方も結構来ているので、その連携ができたらいふことで、それを目指してやっているのです。



先ほど武田さんの話で、行政が間に立つと既存の市民組織、市民団体がつながってくるという話があったと思うのですが、町田ではそれに失敗しています。「町田国際交流センター」が行政の組織かどうかというのは、また議論の余地があるのですが、結局、「町田国際交流センター」で養成講座を立ち上げて連携しようと呼びかけても、町田に今まであった古い日本語教室の組織は、「町田国際交流センター」のやっつけようとしているものに消極的な姿勢を示されるのです。そういった際に、どういうふうにそこをつなげていったらいいのかということ、先ほどの武田さんの、大学が間にいったらいいという話がありましたけれども、それに絡めてコメントをいただけたらありがたいです。

**武田** 一定の目的をもって組織される市民組織と、居住する場所に基づいて組織される地域組織とのつながりは弱いのが普通です。外国人支援という課題に取り組むには、いろいろな組織が協力し合った方がよいのですが、誰がリーダーシップをとるかという問題があります。南魚沼市の事例では、行政が間に入ることによってうまくいきました。これは人口規模によるかもしれません。それぞれ置かれている状況が違いますので、ひとつの事例としてご理解いただければと思います。

**渡戸** 長時間、ご協力をいただきましてありがとうございます。お陰さまで来年度に向けて、非常に充実した会にすることができました。これで終わります。

